

# 国 語 科

羽場邦子・竹森文美・谷 栄次・浜岡恵子

## I はじめに

人・もの・情報が活発に世界中を動き回るグローバル時代になり、現在、様々な観点から教育改革が進められている。これからの時代を生きる子どもたちに求められる資質・能力は何か、そうした資質・能力を身につけるべく教育はいかにあるべきかを明確にしていこう改革の流れである。本校では、今年度から『グローバル時代をきりひらく資質・能力』を培う教育の創造 ―協働的問題解決ができる子どもの育成をめざして―を新たな研究テーマとして設定した。そして、「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を「さまざまな文化や価値観を理解し認め合いながら自分の考えを明確にして問題を解決する力」ととらえ、テーマ実現に向けて次の3つを重視している。

- 主体性（課題が何かを的確に判断し、いくつかの解決方法案を考え、選択・決定する力）
- 多様性（社会の中で自分の良さを大切に、お互いの違いを違いとして認めながら共に高め合う力）
- 協働性（様々な情報や意思、思想、態度等を正しく理解し受けとめ、さらに自分の意見を論理的に伝える双方向的なコミュニケーション力）

グローバル時代というのは、均一化・同一化になることをめざしているのではない。異なる価値観や文化をもったものどうしが柔軟な発想や相手を尊重する態度をもちながら向き合うことこそが、グローバル時代を生き抜く上で重要になってくる。

今年、国語部では、「話す・聞く」活動に焦点をあて、東雲小学校・東雲中学校9年間の学びのつながりを考え、授業のあり方を探ることにした。国語科の「話す・聞く」領域における授業の目的は、目的や相手の意識を明確に持った上で自分の考えを適切に伝える能力や、相手の考えを聞き取り、さらに新たな考えを生み出していくコミュニケーション能力の育成にある。その過程において、異質な考えと出合い、納得したり、折り合いをつけたり、説得したりすることが求められる。このことは、先に述べた「異なる価値観や文化をもったものどうしが柔軟な発想や相手を尊重する態度をもちながら向き合うこと」につながるものである。資質や能力を直接的な指導により身につけるという考え方ではなく、一人ひとりが思考し、相互作用としてコミュニケーションする活動が自ずと生ずる課題を設定したり、場を作ったりする教師の支援を大切にしたい。つまり、子どもたちにとって必然性のある問題に対して解決しようと話し合う、切実感のある課題に対して互いに自由に考えを述べ合い、考えを深め合う、そうした過程の中で、異質な考え方と出合い、柔軟な発想や相手を尊重する態度を身につけ、互いに高まり合っていく、このことがまさに「グローバル時代をきりひらく資質・能力」と国語科でつけたい力の結節点になると考えている。

## II 本年度の研究計画

### 1 研究の目的

国語部では研究テーマを次のように設定した。

#### 国語科の研究テーマ

東雲小学校・東雲中学校9年間の学びがつながる「話す・聞く」の授業づくり  
―異質な考えを受け入れ、共に高まり合う協働的な言語活動を通して―

「話す・聞く」能力は、目標の焦点化を図り、実際に「話す・聞く」活動を繰り返し経

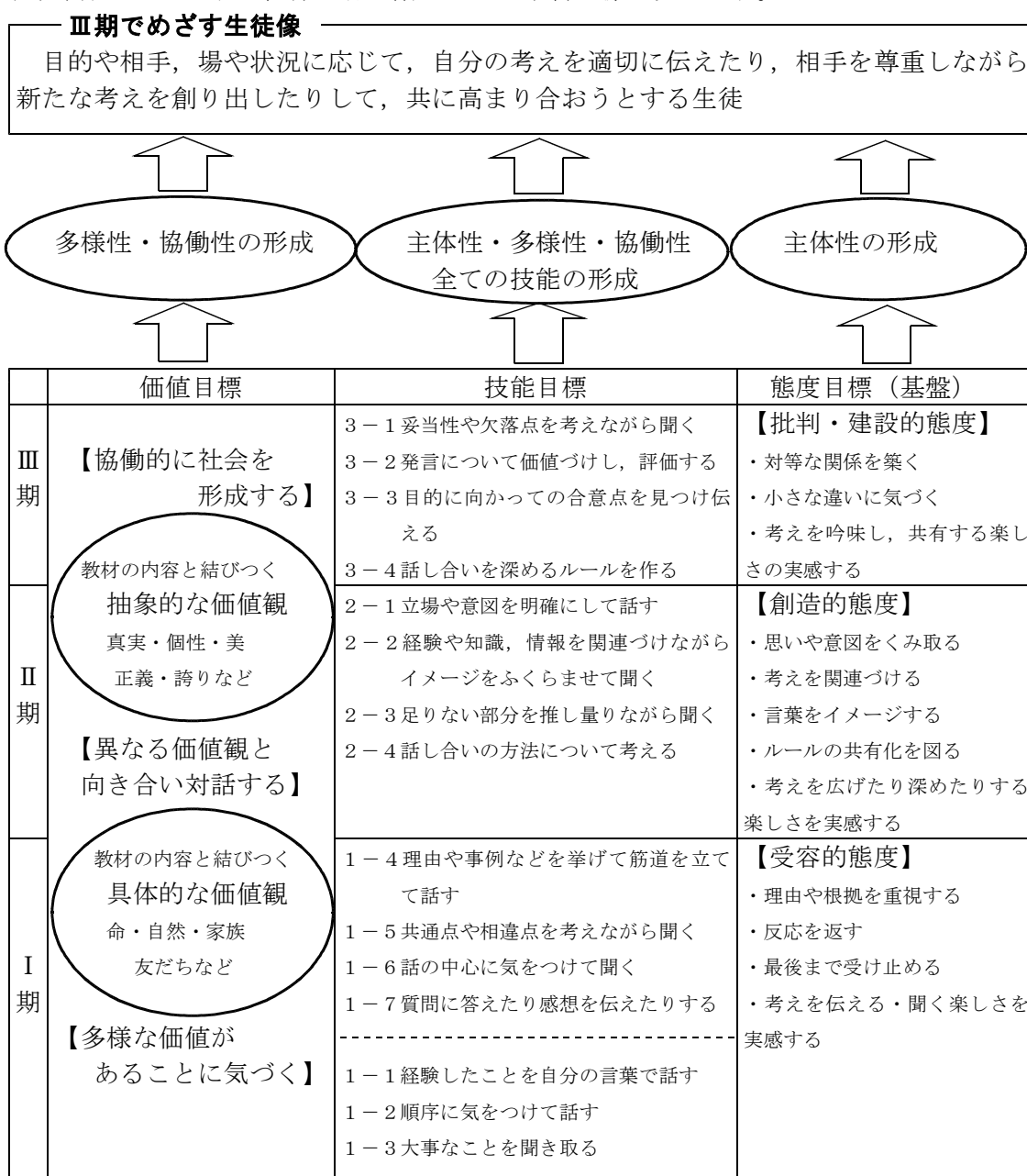
験することを通して身につけていくものである。異質な考え方と出会い、柔軟な発想や相手を尊重する態度を身につけ、互いに高まり合っていく「話す・聞く」活動を実現する国語科授業の視点を見出すことを目的とする。

## 2 研究の方法

- (1) 各段階の「話す・聞く」の目標，及び内容を整理し，学習指導要領をもとにめざす生徒像と学習目標について考察し，小学校・中学校9年間の学びの系統性を検討する。
- (2) 主体性・多様性・協働性を基軸にした授業づくりのポイントについて明らかにする。
- (3) 授業実践を通して「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を培う「話す・聞く」授業について，その成果と課題をまとめ，知見を得る。

### (1) めざす生徒像と各段階における目標

本校では，児童・生徒の発達段階，学び方，わかり方の進行に着目して，Ⅰ期（小1年生～4年生），Ⅱ期（小5年生～中1年生），Ⅲ期（中2年生・3年生）を設けている。中学卒業時のめざす生徒像と各段階における学習目標を次に示す。



「グローバル時代を生き抜く資質・能力」として国語科では、異質な考え方と出会い、柔軟な発想や相手を尊重する態度を身につけていくことの大切さを述べてきた。ここでは、国語科の学力（基盤となる態度目標、技能目標、価値目標の3つの領域でとらえる）と結びつけて、具体的に考えていくことにする。

まず最初に、基盤となる態度目標について述べる。話す・聞く活動は、他教科・他領域など、学校生活のあらゆる場で行われている。すべての学び、生活に関わるものが基盤としての態度目標にあたる。Ⅰ期では、受容的な態度でしっかり相手と向き合うことを大切に考えたい。まず相手の言っていることや思っていることを受け入れる姿勢をもつことが双方向的なコミュニケーションづくりには欠かせないものとなる。途中で口を挟むことにより相手の意志を遮ったり、思い込みによる勝手な決めつけをしたりせず、最後まで聞き入れる、正確に聞き取ることが重要になる。その上で、何らかの反応を返すことで、安心感のある関係づくりをめざしたい。また、こうした話す・聞く活動を日々繰り返すことで、話す行為・聞く行為そのものの楽しさを実感させたい。Ⅱ期では、お互いの考えを関連づけたり、具体的なイメージを描きながら聞いたりして相手と共有することで、考えを広げたり深めたりする楽しさを実感させたい。言葉だけで理解するのではなく、立場やそれまでの流れ、仕草や表情などを含めて相手の伝えたいことを創造的にとらえるようにしたい。Ⅲ期では、対等の立場で考えを出し合い、微妙なニュアンスの違いや言葉遣いに目を向けながら相手の考えを吟味し、共有する楽しさを実感させたい。建設的な話し合いが自分たちの力で進めるできることをめざしたい。態度目標は「主体性」の形成に大きく関わるものとしてとらえている。

次に、技能目標について述べる。これは、話す・聞く活動を行うために必要となる技能を示したもので、学習指導要領をもとにⅠ期・Ⅱ期・Ⅲ期のそれぞれの段階において重点的指導事項として考えている。1-1, 1-2, 1-3はⅠ期でも前半（小学校1・2年生）で身につけさせたい技能である。Ⅰ期前半での学習を土台としてⅠ期後半（小学校3・4年生）で1-4, 1-5, 1-6, 1-7の目標に向けて学習を積み重ねていきたい。Ⅱ期・Ⅲ期も同様で、Ⅱ期の技能目標はⅠ期の学習を土台に、Ⅲ期の技能目標はⅠ期とⅡ期の学習を土台にして、スパイラルに高まっていくよう、一人ひとりが繰り返し話す・聞く活動を実際に行うことを通して、身につけていきたい技能である。技能目標は「主体性」「多様性」「協働性」の全てに必要となる技能としてとらえている。

最後に、価値目標について述べる。話す・聞く活動において、最も重要になるのは「話してよかった」「聞いてよかった」「話し合っただけよかった」という楽しさを実感できることである。その楽しさの実感が、次への意欲にもつながる。楽しさを実感するためには、話す・聞く活動の意義や意味を見出すことが必要になる。Ⅰ期では、考えを伝える、聞く行為、そのものへの楽しさを十分に感じることを経験させたい。生活と結びついた具体的な話題について、自分とは異なる様々な考え方、感じ方、とらえ方にふれることを大切にしたい。

Ⅱ期では、友だちの考えを聞き入れ、聞き取りながら、自分の考えが変容したり、新たな気づきが生まれたりする楽しさを自覚させたい。Ⅲ期では、多様な考え方の一つ一つを吟味しながら自分たちの力で明らかにしたこと、解決したことなど、学びの成果を共有することの価値、その喜びを経験させたい。学年が上がると、より抽象的なもの・ことが話題となり、こうした価値目標は「多様性」「協働性」の形成に大きく影響するものとしてとらえている。

こうした考えを踏まえて、国語科の授業を含めたあらゆる場で培ってきた態度を土台にしなが、教師が技能目標を明確にした授業、子どもたちが協働的な学びの中で価値を見出す授業を行うことで、めざす生徒像を実現したい。

## (2) 授業づくりのポイント ―主体性・多様性・協調性を基軸にして―

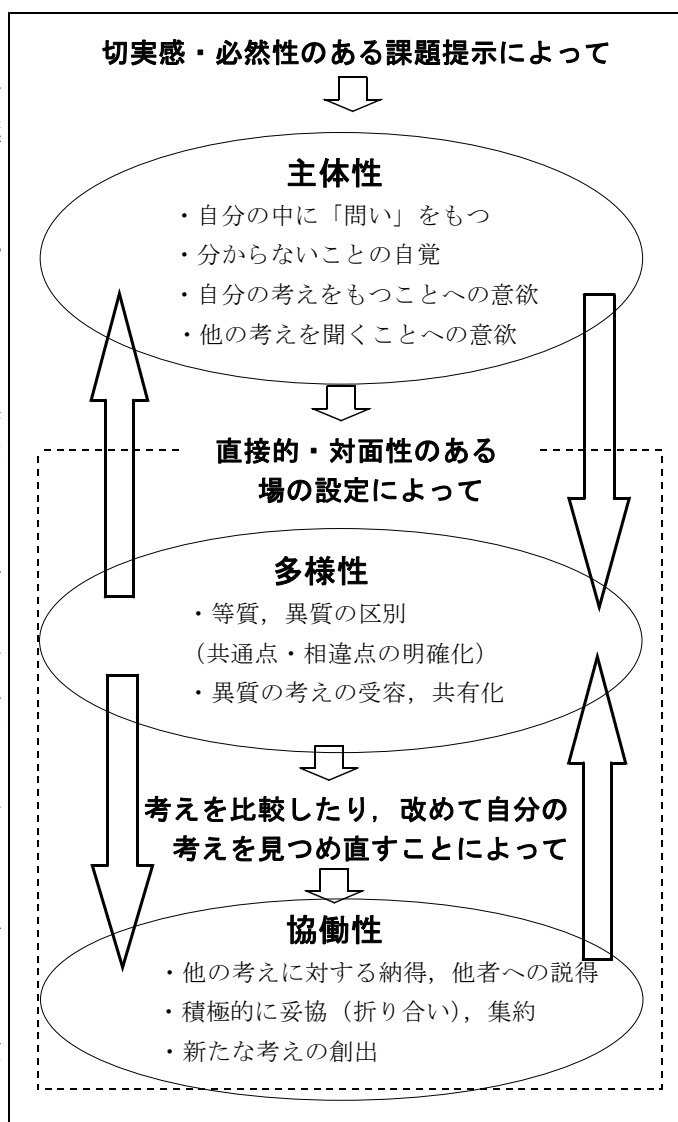
ここでは、国語科のサブテーマ「異質な考えを受け入れ、共に高め合う協働的な言語活動」のとらえについて整理する。

子どもたちにとって切実感が生まれる、意味ある課題を、協力して考えを出し合うことで解決に向かうことができたという実感がもてるように単元を構想したい。一単位時間の課題設定の場においても、考えざるをえない、自然と場面に引き込まれ思わず考え込んでしまうような文脈を仕組み、工夫する。その際、子どもたちの中に「問い」が芽生え、しっかりと根づくことが特に重要になってくる。これが、問題解決的な学習における出発点となり、後に続く学習への主体性を生み出す原動力となっていく。

学習に対する構えが主体的なものになれば、目的を見定め、目的を達成させようと進んで考えたり、他への働きかけが積極的になったりする。「ここが知りたい」、「ここがはっきりしない」ことが明確になれば、学ぶ意義や意味も感じられるものとなる。また、日常のあらゆる場面において積極的に自分の考えを言う、聞いてもらえるという支持的風土が基盤としてできているかどうかが大切になってくる。

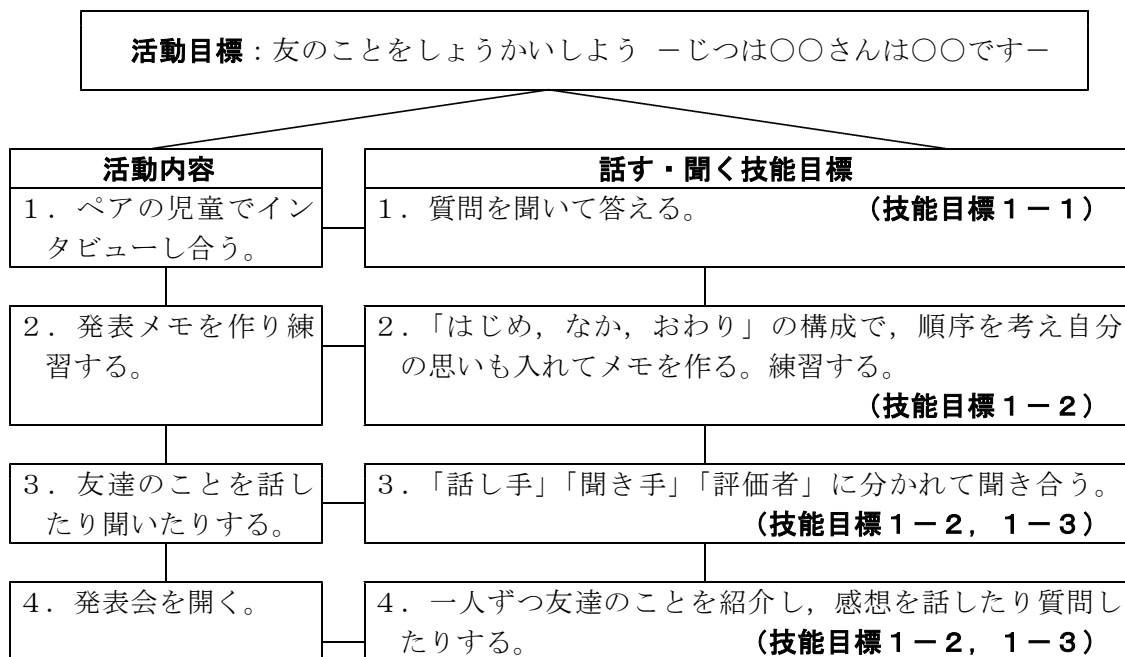
直接的に、対面的に相手と向き合い、互いの考えを交流し合う場面では、異質な考えどうしを戦わせるのではなく、お互いに歩み寄るためのものとし、多様性を容認する、相手の考えを尊重する態度を大切にしたい。異質な考えを受け入れ、理解を深めてこそ、自分の考えを深める、広げることにもつながっていく。時には納得できるまで訊ねたり、説得したり、折り合いをつけてまとめたり、考えを持ち寄って集約したりすることを通して生まれる認識の深化・拡充こそが集団での学びの価値となり、楽しさにもなるだろう。

また、こうした学び合い、協働的な問題解決の場では、「よく聴き、よく訊く」ことが学びを成立させるためには欠かせない。「ちがいを」「ずれ」を前向きにとらえ、素直に自分の考えを表出し合える安心した関係づくりができていれば、協働的な学習に対する構えもより主体的なものになるだろう。

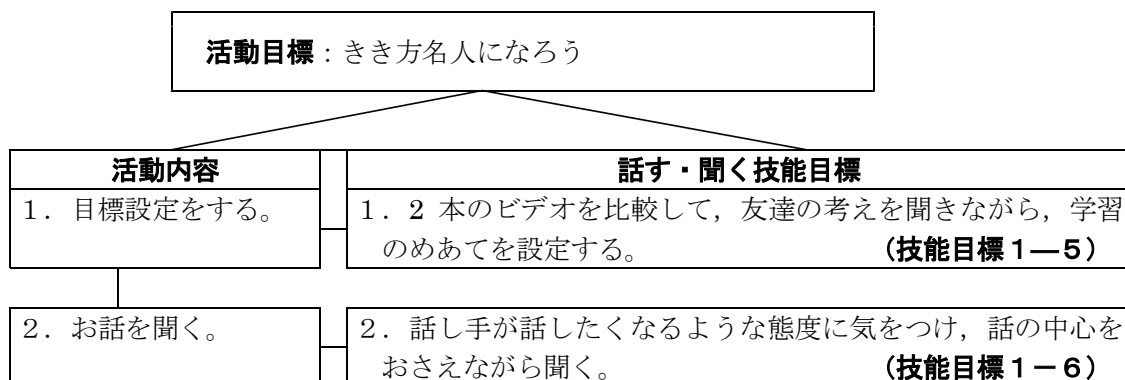


### 3 研究会当日の授業

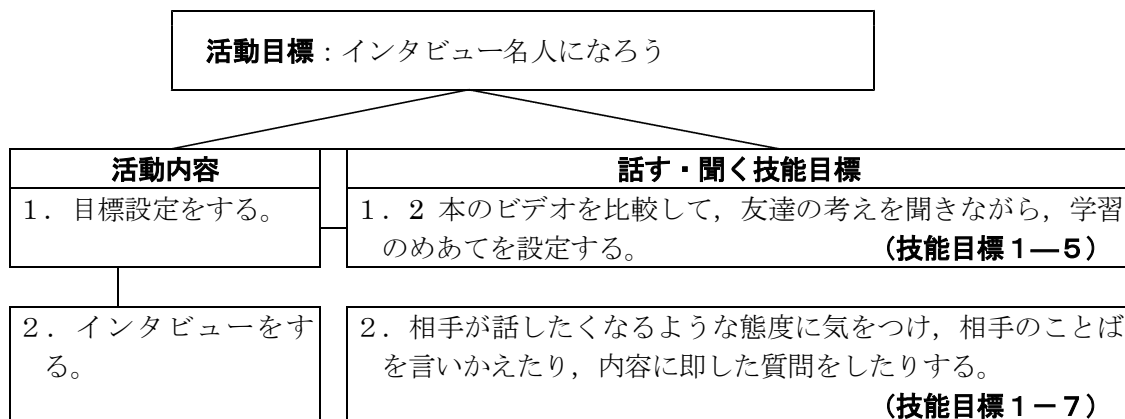
#### (1) I 期 (小学校 1・2 年生)



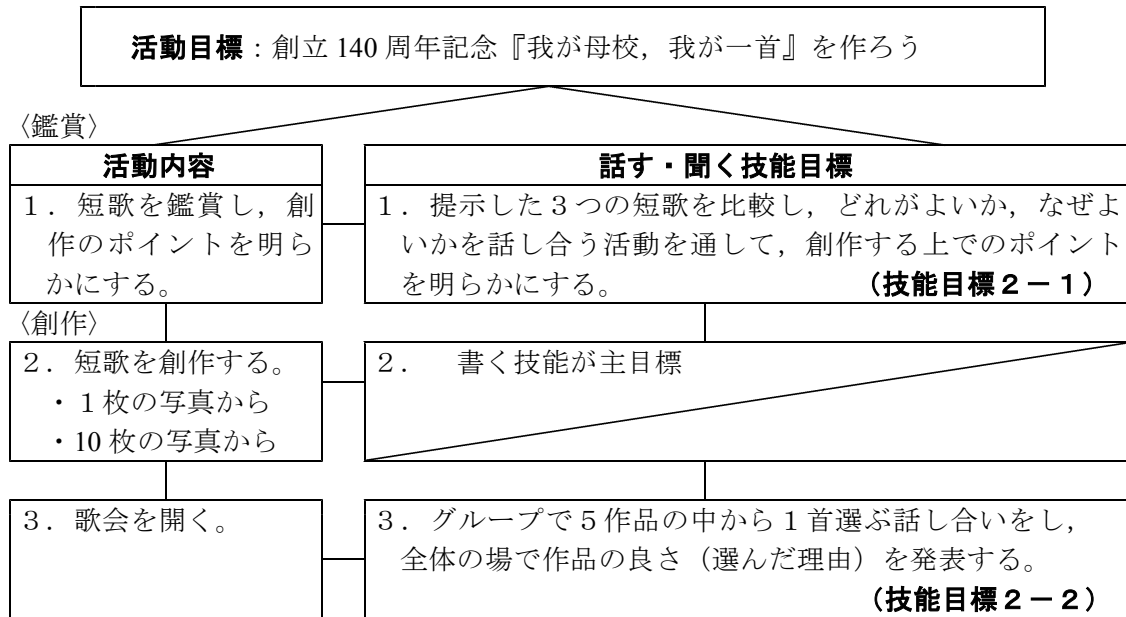
#### (2) I 期 (小学校 3 年生)



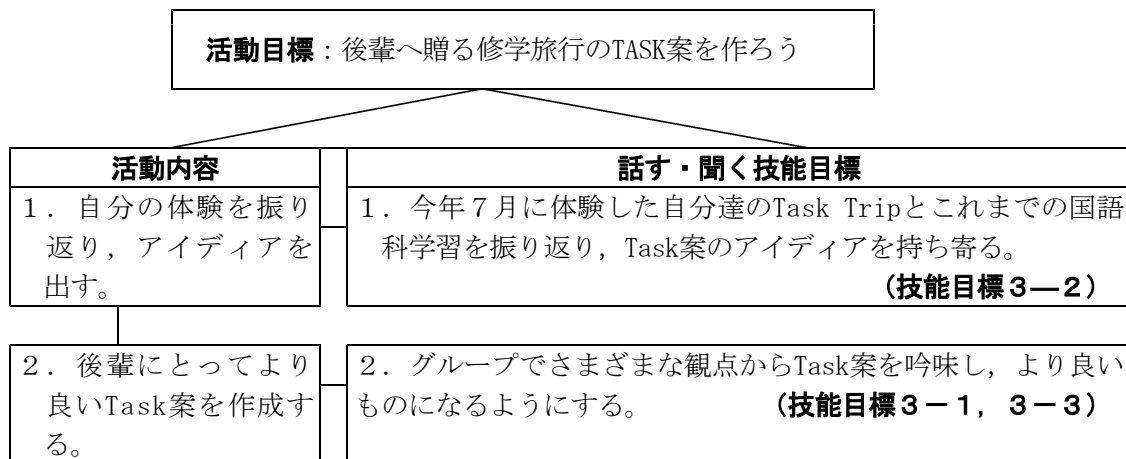
#### (3) I 期 (小学校 4 年生)



(4) II期 (小学校6年生)



(6) III期 (中学校3年生)



4 研究の成果と課題

授業実践を通して「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を培う「話す・聞く」授業について, その成果と課題をまとめ, 知見を得た。

(1) 各実践のふりかえり

① I期【小学校1・2年生】

本実践は, 友達にインタビューしたことを4人グループで, 学級全体で聞き合う活動を行った。話すためのメモを作り接続語を使うことで, 経験したことを自分の言葉で話す, 順序に気をつけて話す姿が見られた。4人グループでは, 話し手, 聞き手, 評価者を分担して感想や質問を行った。そのため, 話の大事なことを聞き取ろうとする姿勢が生まれた。話すことに苦手意識をもっている児童は, 学級全体で話すより4人グループで話すことを好んだ。学習前と学習後のアンケートでは, ほとんどの児童が話すことも聞くこともよくなっていると答えた。生活と結びついた具体的な話題について, 考えを伝える, 聞く行為そのものへの楽しさを感じることを経験させることで「話す・聞く」の力をつけていきたい。

## ②Ⅰ期【小学校3・4年生】

「相手を意識して聞く」「話の内容を聞き取る」ことをめあてにして話し合い活動を行った。児童のめあてに対する振り返りを見ると肯定的な評価が多かった。今後は、個別に課題を抱えている児童を意識しながら、様々な場面で模範となる具体的な姿を共有していくとよいだろう。また、親しい相手だけでなく様々な相手を意識してコミュニケーションをとる場を設定することで、相手への意識が高まり、結果、自分の姿を正しく振り返る機会となるのではないだろうか。話し合い活動では、中学年児童は活動に集中してしまうため振り返りが難しくなる。発達段階を考えて、児童の姿や話の内容を冷静に見直す機会を授業や単元の中に設定するとよいだろう。

## ③Ⅱ期【小学校6年生】

本年度は、小学校6年生を対象にして「対話」（話し手と聞き手が立場を自由に入れ替わりながら交わされる2人での言葉のやりとり）を取り入れた授業実践を行った。「対話」が、コミュニケーションの最も基本単位であること、子どもたち全員が話さざるを得ない、聞かざるを得ない状況が生まれやすいことの原因からである。8割の児童が、自分の考えを話しやすい、相互交流によりちがう考えにもふれられ、考えが広がるなど「対話」の活動に対して肯定的であった。「対話」が続かないとの理由から抵抗感を感じる児童もいたが、鍵になる言葉を取り出し関連づけて尋ねたり、話したりすることで「対話」の世界が広がり、実のある活動になることが明らかになった。

## ④Ⅲ期【中学校3年生】

本年度は、中学校3年生を対象に課題解決のために「話し合い」を活動の中心に据えた授業実践をした。「話し合い」活動をさせるうえで重視したことは、各自が担当した観点について情報を持ち、メンバー全員が「話すべき内容をもった」状態をつくることと、「話し合い」が課題を解決するために有効にはたらいた実感をもたせることである。これらの点に関して、振り返りの記述や授業での観察で、Task作成のために互いがしっかりと意見を出し合う様子を見取ることができ、学習の達成について、肯定的な回答が学習後に増えている結果を得た。今回の研究では、「話し合い」活動を経て生徒の学習への意識や態度にどのような変容があったかということは明らかにできたが、「話し合い」をどのように評価するかということについては今後の課題としたい。

### 【参考文献】

- 文部科学省、『小学校学習指導要領解説 国語編』, 2008.
- 文部科学省、『中学校学習指導要領解説 国語編』, 2008.
- 杉江修治著、『協同学習入門 基本の理解と51の工夫』, 2011.
- 位藤紀美子著、『言語コミュニケーション能力を育てる』, 世界思想社, 2014.
- 全国大学国語教育学会編、『国語科教育学研究の成果と展望』, 明治図書, 2002.
- 森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一著、『新訂 国語科教育学の基礎』, 溪水社, 2010.
- 難波博孝・福山市立湯田小学校, 『イメージの形成と共有によるコミュニケーションの授業づくり』, 明治図書, 2007.